

ERINA賛助会セミナー

「南北・中朝関係の進展と今後の展開 —米朝首脳会談をにらんで—」

日 時：2018年6月7日

場 所：新潟大学 駅南キャンパス「ときめいと」

講 師：オリエンタルリンク代表、グッドファーマーズ研究所 所長、元韓国大統領統一政策諮問委員 **董龍昇(トン・ヨンスン)**

はじめに

現在、北朝鮮、朝鮮半島をめぐる情勢は1時間先も見通せないほど目まぐるしく変化している。数日前には、あるメディアに投稿し、その後、米朝首脳会談がキャンセルになったという連絡を受け、原稿を訂

正して再度提出したが、翌日また書き直してほしいということがあった。このように状況は目まぐるしく変わり、我々の予想できなかった事態が起きている。

私たちはなぜ予想できないのだろうか。その理由は、この一連の事態を主導している人たちが、我々の拠り所とする基本的

な枠組みでは分析できない人たちだからだ。例えば、我々は「金正日時代の北朝鮮」という枠で分析したりする。北朝鮮では、金正日(キム・ジョンイル)と金正恩(キム・ジョンウン)の2人の位置付けは重要な意味を持っているが、この2人の状況はまったく異なっている。それなのに我々は、

金正日時代の枠組みや物差しで金正恩の行動を分析しようとしている。そのため、我々の分析は誤った方向に行ってしまうことになる。

アメリカについても同様だ。従来のアメリカの行動を分析する枠組みにトランプ大統領を当てはめようとするため、誤った方向になってしまう。この予想のできない2人が今、対立したり、衝突したりしているから、ますます状況は難しい。

私はアメリカについてはそれほど詳しくないが、金正恩については長い間、研究してきた。そこで本日は、金正恩が何を考えているのかについて話したい。

もう一人重要なプレーヤーがいる。それは、韓国の文在寅(ムン・ジェイン)大統領だ。そこで本日は、文在寅政権の経済圏構想である「新朝鮮半島経済構想」についても説明したい。

そして最後に、シンガポールで開かれる米朝首脳会談について、結果を予想するというよりは、首脳会談の意義を整理して本日のまとめとしたい。

金正恩委員長について

金正恩朝鮮労働党委員長は今、何を考えてこのような事態を展開しているのだろうか。どんなに我々が否定しようとしても、今の状況の運転席に座っているのは金委員長だ。しかし、我々は彼のことをあまりにも知らなすぎる。今から6カ月ほど前まで、彼は頭上に爆弾を担ぎ、足元にはロケットがあり、ロケットマンとして無慈悲な粛清を続ける「ならず者」とみなされていた。しかし今の評価は、若くして非常に卓越した政治的リーダーシップと能力の持ち主だ、と180度変わっている。どちらが正しいのか。今となっては、ふたを開けて結果を見てもみるしかない。

いくつかの観点から金正恩という人物を分析してみよう。まず、金委員長は極めて孤独な人物だ。彼はスイスに留学して、西側の文物に触れ、それを北朝鮮社会に適用するとすればどうなるかについて、長い間考えてきた。最高権力者となり、自分の考えてきた構想を実行したいのに、それに付いてきてくれる者たちがいなかった。その結果、彼は「暴君」と呼ばれるように

なる。彼は非常に孤独である。「彼は孤独だ」ということから我々が引き出し得る結論は何か。我々はまた金正恩にだまされるかもしれないし、北朝鮮という国にあざむかれるかもしれないが、彼が今試みていることをサポートしてやる必要がある、ということだ。

2つ目の特徴として、彼はブランドを好む。北朝鮮という国をブランド化したいと考えている。彼は一級品がわかり、その良さを知っている。彼は自分の国を一流の国にすべく行動を起こすが、何か行い度に壁にぶつかった。例えば、娯楽施設や公園をつくらうとヨーロッパの美しい芝生の写真を実務者に見せ、同じようなものをつくらせようとした。しかし、現場を視察してみると、芝生がきちんとつくられていなかった。腹を立てた金正恩が芝を抜き取り、その様子が報じられると、北朝鮮のあちこちでとにかく芝生が植えられたという。自分の考えはあるが、北朝鮮という国がシステムとしてついてこない。そういうもどかしさや孤独を彼はずっと感じていた。

3つ目の彼の特徴は、負けん気が強い、勝負欲が強いことだ。金正恩の母親には息子が二人いた。金正哲(キム・ジョン Chol)と金正恩だ。正恩は二男なのに、なぜ後継者となったのか。それは、彼が失敗から学ぶことができ、必要と思えば、自分を周囲の状況に合わせることができ、どんな演技も演出もできる人物だからだった。

4つ目の特徴として、彼は「正常」や「普通」にこだわる。金正日時代の北朝鮮は、何かを隠すことに汲々としていた。何か起きると、官僚たちは責任を取られるのが怖くて隠した。そういうことが繰り返された結果、北朝鮮では何でも隠すようになった。それが北朝鮮の日常の姿であるかのように外部の目には映った。しかし、金正恩が政権についたとき、何でも隠す慣習のせいで彼は大きな壁に突き当たった。

2009年初め頃から、金正恩は「100日戦闘」とか、「150日戦闘」と言った社会主義競争を始めた。これは、北朝鮮の国営経済の限界を測るためのテストのようなものだった。ところが、北朝鮮の官僚たちは全員、「なんでも上手いっている」と報告した。2009年当時の労働新聞の第1面は、すべての工場が上手く稼働してい

るという記事ばかりだった。そのような報告を受けて、何度か現地も視察して、彼が踏み切ったのが、2009年11月30日の「貨幣交換」だった。ところが、貨幣交換を実行したところ、実情はまったく違っていた。そこで金正恩は朴南基(パク・ナムギ) 財政部長を処刑し、虚偽報告を禁止し、実際に達成できる計画の作成を求めるようになった。例えば、アパートが倒壊した際にはその映像が公開された。ミサイル実験も、失敗も含めその都度、公開している。このようなことは金正日時代には見られなかった。しかし、公開する方が正常なのだ。金正恩は「ノーマル」、「正常」、「普通」を目指している。

最後の特徴は、「果敢」だが「非常に慎重」というものだ。これは一見、矛盾するように思える。「果敢」は35歳の若き政治指導者という面にもつながる。半面、「慎重さ」は、これまでの統治の経験から得たもので、何事も思い通りに行かないことを前提として考えるということだ。したがって我々は、金正恩という人物をあまり侮ってはならない。金正恩はかなり長期にわたってポストを守り続けるだろう。我々も入念に彼を分析し、事細かく対応していく必要がある。

文在寅政権の新朝鮮半島経済構想

歴代の韓国の政権は、発足と同時に自分たちの対北朝鮮政策を明らかにするために名前を付けてきた。例えば金大中(キム・デジュン) 政権は「太陽政策」、盧武鉉(ノムヒョン) 政権は「平和繁栄」、李明博(イ・ミョンバク) 政権は「非核・開放3000」、朴槿恵(パク・クネ) 政権は「平和プロセス」だった。しかし、これらの中身はだいたい同じようなものだ。私もこのような政策づくりに直接的・間接的に関わってきたが、だいたい書類を引き出しから引っ張ってきてリアレンジして名前を付け直すようなものだった。文在寅政権の対北朝鮮政策には、私はまったく関わっていない。それは、私がサムスン研究所を辞めたからで、政策づくりにフリーランスの人間は入れてくれない。なので、直接見てはいないが、おそらく同じようなことだったのでないか。

ところが、この新朝鮮半島経済構想を

真剣に分析してみると、従来のものとは完全に違っていた。新朝鮮半島経済構想の策定に関わった人たちは、文在寅大統領が本当は何をしたいのか、きちんとわかっていないのではないのか。従来の対北政策と文大統領の政策との違いは、3つにまとめることができる。

まず、「平和優先」だ。かつての対北朝鮮政策は、北朝鮮と交流・協力することによって、化石化してしまった北朝鮮を変化させてみようというものだった。そうすると、北はどうしても守りに入ってしまう。しかし今回の朝鮮半島新経済構想は、北朝鮮が変化できるよう外堀から埋めるようなものであり、北朝鮮が意思を持ってやらなければ、外部の環境は整わない。それはすなわち、米朝関係の改善だ。米朝関係が改善しなければ南北の交流は意味をなさない。そこで文在寅政権は、まず平和ありき、平和優先主義になった。

2つ目は「共生」だ。かつての政策は、まず北朝鮮を支援し、彼らが変わってきたら、その変化の度合いに応じて経済交流も拡大する、というやり方だった。しかし、文在寅政権のやり方は違う。北朝鮮は変化を望んでおり、そのプロセスの中で韓国をはじめとする周辺諸国が何か果実を手に行うことができるのではないか、というアプローチだ。北は今アメリカと交渉しているが、経済的な保証を求めている。金正日体制だったら、対米交渉で経済的な保証を求めたはずだ。前述のように、金正恩は今、北朝鮮を普通の国にしたいと思っている。ただで援助を受けて何かをしようというのは、金正日の時代に慣例化されていた一つの体質だが、北朝鮮は国際社会から正当な形で借款もできる国を目指す。北朝鮮の豊富な地下資源を開発し、輸出することで得た収益で北朝鮮を開発したいと考えている。北朝鮮がそのような意思を持っているのであれば、南北が協力することで共生も可能だということになる。

文在寅政権が最終的に目指すところは、北東アジア経済共同体の形成だ。これは非常に意味深いことだ。「朝鮮半島統一」というと、皆さんは東西ドイツの統一を連想するだろう。しかし、ドイツの統一は東西の冷戦体制が終焉を告げたことで手にできたチャンスだった。30年前、ドイツ統一

当時の東西の経済格差は1:4だった。今、南北朝鮮の経済格差は100:1だ。物理的な共生、統一、統合は自殺行為だ。冷戦が終結し、環境は変わった。その中で世界が協力し合おうという構図になるとすれば、南北の統一の在り方も、それに合わせて変化すべきだろう。その第一歩が北東アジア経済共同体の形成なのだ。

米朝首脳会談後の朝鮮半島

現在の朝鮮半島が置かれている地政学的構図はどうか。1951年にサンフランシスコ講和条約があり、その後、日米間が同盟のようにになっている構図がつくられた。韓国や日本に住む人たちは、サンフランシスコ講和条約によって構築された今の構図は絶対に変わらないだろうという考え方を持っている。北朝鮮も同様に、中国・ロシア・北朝鮮のトライアングルの構図も絶対に打ち破られることはないと思っていた。ところが、北朝鮮は裏切られた。1990年代初め、韓国は中国、旧ソ連と国交を正常化し、北朝鮮は韓国との国交正常化はできずにいる。

停戦協定、平和協定、北朝鮮の非核化が取り沙汰されている。これらは非常に困難を極めるプロセスだと思うが、それが今スタートした。それは、北朝鮮が日本、アメリカと国交を正常化させるプロセスに一步踏み込んだことを意味する。言い換えると、太平洋戦争終結後、北東アジアに構築された地政学的構図が地殻変動を起こしている、解体し始めている、ということの意味している。

2つ目の特徴は、韓国と北朝鮮がそれぞれ個別の国家としての形態を持つようになることだ。韓国でこのような話をすれば、石を投げられるだろう。しかし、現実には現実だ。韓国憲法では、大韓民国は朝鮮半島の唯一の合法的政府だと明記されている。日米が北朝鮮と国交正常化しない理由は、朝鮮半島における唯一合法的な政府は韓国だと両国が考えているからだ。1991年には南北基本合意書が発表され、そこには、南北は朝鮮半島の統一を目指す特殊な関係にある、と記されている。

1991年、韓国と北朝鮮はともに、国連の正式な加盟国となった。南北の個別国

家となったことで、それ以降、例えばオリンピックで南北単一チームを組むことが異様に見えるような関係になっていく。米朝首脳会談の後は、南北間のFTAが必要だと私は主張している。

米朝首脳会談後の3つ目の特徴は、北朝鮮が市場になることだ。金正恩は北朝鮮を変えたいと思っている。改革・開放を彼は願っている。

北朝鮮の改革・開放が中国式なのか、ベトナム式なのかがよく議論される。では、中国式とベトナム式は何かどう違うのか。答えられる人は少ない。中国式とベトナム式には大きく分けて3つの違いがある。1つ目は、外部の環境変化を優先するか、内部を優先するかの違いだ。中国は1972年にピンポン外交を行い、対米関係改善を優先し、その後、改革・開放に乗り出した。ベトナムは1986年にドイモイ政策を展開したが、その時に対米関係の改善はなかった。政策は成功せず、1990年代半ばに対米関係を改善し、その後、外国資本がベトナムに入るようになり、経済改革を進めている。金正恩がやっていることは中国式と言えるだろう。

2つ目の違いは資金源の違いだ。中国は改革・開放の初期に自分たちが貯めていた資本と、香港を中心とする華僑の資本を元手とした。これによって中国は独自の改革・開放路線を歩むことができた。ベトナムは、対米関係改善の後、国際機関からの資金注入によって改革・開放を進めた。その結果、国際機関からかなり強い干渉を受けた。

3つ目の違いは、中国の改革・開放のやり方は「点・線・面方式」といわれ、ベトナムは最初から「全面開放」であることだ。北朝鮮は今、22の経済開発区と5つの開発特区を持っており、それらは国内全土に散在している。資金は、韓国の資本を求めている。日本からの資金も求めている。国際機関からの借り入れや資金にはかなり時間がかかるだろう。つまり、改革・開放の方法はベトナム式だが、財源の面ではベトナム式と中国式のミックスだといえよう。

北朝鮮の人口は2500万人なので、市場としてはそれほど大きくない。ハイリスク、ノーリターン市場だ。北朝鮮は地政学的に「北東アジアのブラックホール」と呼ば

れてきた。しかし、これまでできなかったことが可能になる。

例えば、日中韓を結ぶ大型プロジェクトも可能になるだろう。大型プロジェクトは以前もあったが、大型プロジェクトが上手くいけば北が変化するだろうと見られていたため、北は変化を拒否する姿勢を取らざるを得なかった。しかし、北朝鮮のリーダーが交代し、このようなプロジェクトに積極的

な姿勢を示すのであれば、この種のプロジェクトは実現可能ということになる。なぜなら、北朝鮮自らが変化を望んでいるからだ。「変化を拒む北朝鮮」という前提が崩れたのだ。

まとめ

さまざまな切り口から話をしたが、これら

はすべて繋がっている。6月12日、米朝首脳会談が行われると、大きな輪郭のようなものが浮かび上がってくるだろう。今後の方向性も見えてくるものと期待している。仮に、大きな輪郭が出なかったとしても、プロセスは始まった、と言いたい。そして、このプロセスは相当な期間、進み、続く。朝鮮半島を取り巻く情勢大きな変化がこれから起きてくることになる。

<質疑応答>

Q. 金正恩氏を支える人材がいけないという話だったが、人材育成、人材教育はどうなっているか。また、今回の米朝会談の裏には、経済制裁が効いていると言われているが、実際はどうか。

A. 北朝鮮の官僚は化石化していると述べたが、彼らは指示には非常によく従う。しかし、金正恩と考えを同じくし、政策について彼と議論や討論をし、仕事ができる人材がいけない。実は、人材育成にはかなりの力が注がれている。金正恩が政権を取って真っ先にやったことは、教育改革だった。義務教育制度をそれまでの11年から12年にした。「普通の国」としてやっていきたいという気持ちの現われだった。

経済制裁の効果については、当然、あった。そもそも北朝鮮の経済システムは、貿易や対外関係がモノをいうシステムではない。正確な数字を持ち合わせていないが、社会主義体制が崩壊する以前の北朝鮮経済の対外依存度は10%に満たなかった。しかし社会主義体制が崩壊した後、北朝鮮の貿易依存度は10%を超えた。南北の経済交流が活発で日本とも経済交流があった頃、北朝鮮経済の対外依存度は15%を少し超えるぐらいだった。2010年から対北朝鮮経済制裁が強化され、日本は対北朝鮮経済制裁をそれに先立つ2006年ぐらいから始めている。その結果、日米韓との経済協力がストップした。その後、我々は「風船効果」と呼んでいるが、対中貿易が拡大した。その頃の北朝鮮経済の対外依存度は24%になった。つまり、24%分が経済制裁効果だということが

できる。

韓国の場合、対外依存度は90%を超える。韓国のような国に経済制裁をすると、本当に痛い。しかし北朝鮮はそういう国ではなく、今はそれほど痛くない状況だと思う。対外経済交流をやっている部門や関係者は辛いかもしれないが、一般国民はそれほど感じていないはずだ。北朝鮮にとっていちばん辛い制裁は国連の制裁ではなく、アメリカの敵性国家政策だ。アメリカの敵性国家は、手足を縛られてしまう。例えばアメリカの敵性国家は金融取引ができない。経済制裁があったから今の状況があるとは思わないが、経済制裁に関連する根本的問題を解決したいから、今の情勢に至ったと言えるだろう。

Q. 板門店宣言にあった朝鮮戦争の終戦宣言と平和協定という部分で、北朝鮮・韓国・米国の三者、または中国を入れた四者というやり方をどうみればいいのか。また、南北融和の流れは文在寅政権だからできたものと思うが、韓国ではどう評価されているか。

A. そもそも朝鮮戦争が中断し、休戦協定が結ばれた時の当事者は、国連軍、北朝鮮、中国だった。韓国の李承晩大統領は停戦に反対したので当事者に入っていない。南側の作戦統帥権は国連軍がもっている。北側の場合、当初は中国と北朝鮮にあったが、1958年に中国が作戦統帥権を北にすべて渡して撤退した。したがって、休戦協定の当事者は北朝鮮と国連軍だ。国連司令部の代表格として米軍がいる。休戦協定は既に結ばれていて、これから終戦宣言をしようとしている。そのためにサインする必要があり、当事者の北

朝鮮とアメリカがすることになる。韓国は実質的な当事者なので、あとから入れてくれと言って入れてもらった。ここで、中国が不満だということになり、南北の首脳が話し合っって中国を入れ三者または四者となった。

6カ国が参加するのは平和協定の話だ。北東アジアで戦争を無くし平和を構築することは、南北だけでもアメリカ単独でもできない。すべての関係諸国が参加し、北東アジアの平和的状況をつくる。平和協定にはさまざまな意味がある。6カ国が平和協定を結ぶことになると、北東アジアが一つの安全保障共同体をつくることを意味するし、北東アジアの軍事的な安全保障の環境が変わることを意味する。つまり、平和協定は非常に多様な可能性を秘めている。

今の流れは、朴政権でも不可能ではなかったと思う。ただ、当時の米国大統領はトランプ氏ではなかった。絶妙な調和、バランスがあって初めて、このような事態が生まれうる。北朝鮮の目的は経済制裁の解除で、トランプ氏の目的は11月の中間選挙で勝つことだ、と韓国の保守層は考えているが、分析の枠を変えなければならぬと思う。

Q. 金正恩が変化を望んでいるということだが、どの程度まで変化を受け入れられるだろうか。また、南北の個別国家化を、韓国や北朝鮮の国民は受け入れられるだろうか。

A. 10年後、20年後のグローバルスタンダードは、アメリカ、韓国、日本のような政権なのか、中国のような体制なのか、まだわからない。金正恩がどこまで変化を受

け入れられるか、私もわからない。しかし彼は、20年後、30年後に中国のような姿の国のリーダーを思い描いているのではなにか。反対勢力が台頭する可能性はあるだろうが、その過程で、短期的にはいくらでもコントロールが可能だ、という自信が彼にはあると思う。

韓国も北も個別国家化はなかなか受け入れられないだろう。しかし、実質的な国際的地位はそうなる。そうなるのが既成事実だとすれば、それに合わせて制度も変える必要がある。その過程で、南北の国民は新しい状況に適応し、新しい統一の在り方も受け入れることになっていくだろう。それが今、政治リーダーたちが言っていることだ。20年後、30年後に国民が選べるように、今は枠組をつくるときだ、と。

Q. 北朝鮮の経済発展のための資本として韓国と日本という話だったが、制裁対象の国に支援することは難しい。仮に制裁が解除されても、ミャンマーやイラクの例を見ると、まずは国際機関の支援があって、その後にODAが来ると思うが。

A. 北朝鮮が制裁を受けている限り韓国が経済援助できないことは、北朝鮮もちゃんと理解している。今は、国連制裁が解除に向かっている過程で、韓国政府も非常に慎重だ。新朝鮮半島経済構想も、国連の制裁下ではできない。しかも、米朝首脳会談の後、国連制裁が解除される

までに、かなり時間がかかるだろう。

Q. 新潟には、横田めぐみさんをはじめ、北朝鮮に拉致された人たちがたくさんいる。拉致問題解決のシナリオをどう考えているか。

A. 今日の質問の中でいちばん難しい質問だ。北朝鮮は、少なくとも私の知る限り、日本が望むレベルの拉致問題解決が可能な能力の国ではない。北が努力していないわけではなく、日本が望む水準に合わせられないでいる。一般に、北朝鮮は非常に組織だって動き、コントロールされているのを私たちは見ているので、「北は嘘をついている」という論理の展開になってしまう。「拉致は大きな過ちだった」と北側に認めさせるのは極めて大事だ。しかし、到底自分たちが達成できないレベルまで他国が求めるとしたら、相手はあきらめてしまう。そうすると、それ以上は進展できない。

米朝関係が今、動き始めた。その次に動くのは日朝関係だろう。その時にまず、日本がすべきことは、要求のレベルを下げることだ。どこまで下げればいいのかは私にもわからない。日本の皆さんが考えているほど、北はしっかり管理されているわけではないし、隠し立てしているわけでもないと思う。その状況に合わせ、日本は拉致問題に関する日本の立ち位置を整理しなおす必要があるだろう。もちろん、それが日本国内で受け入れられるかどうかはわ

からないが、少なくとも、日本と北朝鮮が交渉のテーブルに着いたとき、日本は予測可能な国だと北が思える状況をつくる必要があると思う。

Q. 日本の拉致問題の解決は大変だとは思いますが、日本と北朝鮮の間のいちばんの意識の違いは何だろうか。

A. 一つ例を挙げると、かつて南北が経済交流をしていた時代、スケソウダラを韓国が北朝鮮から輸入していた。しかし、北から入ってくるスケソウダラは韓国では売り物にならない。目玉がなかったり、傷だらけだったり、ヒレがちぎれていたりして、韓国では売れない。韓国の業者がクレームを言ったところ、北側は「何を言っているのだ、食べられるだろう」と言ったという。これが大きな違いだ。日本の拉致問題についても、このようなことが参考になればと思う。

もっとストレートに言うと、遺骨が送られてきたとき、北朝鮮は拉致問題の非を認め、遺骨も送り、それが自分たちができるベストだった、ということだ。本物の遺骨は見つけれない。そこまで管理されている国ではないのだ。日本の皆さんにできることは、要求の基準を下げることだと申し上げたい。日本の物差しで考え、それを突き付ける限り、日本人の拉致問題は解決できないと思う。